

間違はなく既視感がある！

父の仕事と、母の療養の都合で引越した初日。その地域の探索中に見つけたのは、ゼツタイに見たことのあるお地蔵さまだった。わたしは初めて訪れたその場所で、見覚えのあるものに出会った！イヤ、出会えてしまった！

「ええ……？ これって……？」

ふつうのお地蔵さまじゃない。ふつうはあるはずの両腕は切断されていて、背中から右腕三本と左腕一本が生えている。お地蔵さまだとわかるのはご尊顔がお地蔵さまのものであることと、ふつうじゃない四つの手がしっかりと手を合わせているからだ。左右と右右の組み合わせで。

周囲を見る。一週間後から通うことになる木造二階建て校舎の裏側にはわたししかいない。校舎裏にはコケの生えた百葉箱と手作り感満載の集積所と鎖でぐるぐる巻きの焼却炉と、たぶんつかわなくなつたであろう机やイスが並べられているだけ。

誰もいないよね……？

「本当にあつたんだ……」

わたしは安心して、おしりを着かずに座ってお地蔵さまをよくよく観察する。触るのはなんか失礼な気がするから、触らずに自分で回って見る。

石造りで、大きさは……たぶん五十センチくらい。背中腕の生え際の肉感はなんだかやけにリアルで、なのに無い腕の断面はつくりものらしくきれい。……あ、目、閉じてると思つてたけどうつすら開いてる。それに、生えてる腕の指、全部五本じゃない。六、四、七。変なの。

「でもなんで……？」

そう思うのは当たり前として、つぶやきもこぼさずにはいられなかった。立ち上がって、またお地蔵さまの全体を見る。——うん、やっぱり何回見てもそうだ。

まだ小学生の頃に経験した神隠しの時に見たお地蔵さまで間違いない。

——でも、なんでここに？

つぶやき、思う。

わたしはしばらく考え込んだ。

「かなでー、お昼だよー、戻ってきなよー」

後者の向こう、校庭の方から聞こえたパパの声で、わたしはハツとした。

ごほんの時間！ 帰らなくちゃ！

「はいー！ ぱぱーいま行くよー！」

わたしは迷わず駆け出した。今考えたって仕方がないし、どれくらい考えたって答えは出ないだろう。それに、きつとまた何かが起こるのなら、それはそれでいいや。

今度は何を得られるのだろう。今度は何を失えるのだろう。

ああ、たのしみだな。